『修羅』　お試し版

１、雨宿り

「くすぐってぇよ、高杉」
　窓の向こうから、雨音がきこえてくる。
　年甲斐もなく、ちゃんばら遊びに興じていたら、雨にふられた。
　剣をひこうとしないでいると腕を強引につかまれ、ころがりこんだ先は、たまたまちかくにあった俺の家。
（あとちょっとで、泣かせられたのによぉ）
　恨みのこもった視線をむけると、高杉は殺気に気づいたのだろう。俺の髪に布をあてがい、ワシワシを動かした。乾かす…というよりも、かきまわした。

「もっと丁重に扱え！　丁重に！　っていうか、自分でできるし！」
「うるせぇよ。バカのくせに風邪引きてぇのか、バカ銀」
「ちがいますぅ～。バカっていった人がバカなんですぅ」

　自分のほうが風邪をひきそうなくせに、高杉は、むっとした顔で、一生懸命に俺の髪と格闘している。
　なすがままにされるのは、おもしろくない。世話をされるのは、ガキ扱いされたみたいで、許せない。物心ついたときから、コイツにだけは負けたくなかった。
　奴の着物に布をのせる。布は水をふくんで、すぐに重くなった。おもったより、ぬれているようだ。

「つめたくなってんのは、テメーのほうじゃん」
　襟に手をかけ、両腕を抜いた。コイツの裸なんぞ腐るほど見ているから、ためらいなんてなかった。
「また筋肉ついた？」
　うすく、品よくのった筋肉にそって、布を動かす。ガキんちょのころから知ってるけど、あんな豆粒がよくもここまで成長したものだ。
「男ってずるいよな。俺なんか、いくら鍛えたってつかねぇし」
　自分の腕に目を移す。細枝のように、すらっとしたおんなの腕。もっと丸太

みてぇな腕がいいのに。
「おんなのくせに筋肉ダルマになりてぇのか」
「なりてーよ。おまえに負けたくねぇもん」
　高杉は、苦笑した。
「相変わらずだな」
　俺の髪をかきまぜていた手が、ふいに途切れる。
「銀時」
「なに…ん――ぅっ」
　ぐいっと顔を持ちあげられ、強引にくちびるをふさがれた。あいだに冷えきった舌が割りこんできたかと思うと、激しくむさぼられる。
　俺は、さからわなかった。それどころか唇をゆるめ、導きいれる。
「――ふぁ」
　からめあいながら温めあうと、窓のそとよりも激しい水音が、室内にひろがった。

　俺と高杉のあいだでは、条件反射みてぇなものだ。
　もっともはじまりは、喧嘩の延長線上だけど。

　ある日。
　――『大人のやり方』だのなんだのいわれて、くちびるのあいだから舌が入ってきた。びっくりして突きとばすと、小馬鹿にされた。
　くやしくて応戦しているうちに、ハイっ。テクニシャンのできあがりだ。
　ヅラに試したら腰をぬかした。威力のすさまじさがうれしくて、高杉に報告したら、なぜかヅラを半殺しにいった。

　なにはともあれ、それ以来、『大人のすること』と称して、触れあったり、舌でなめっこをしたが、先にビビッたほうが負けだという暗黙の了解ができていた。
　まぁ、半分ガキとはいえ、オトコとオンナのことだ。大人がみたら、怒るだろう。
　でも、コイツとの駆け引きは最高におもしろいし、なにより気持ちよかったから、拒絶はしなかった。
　だけど。

「もう…よせって」
　太腿にはいあがってきた手のひらを、ぴしゃりと叩く。

「なんで」
「最近、触り方が、エロイんだよ！」
「そのわりには」
　拒否されて、かえって興がのったらしい。口角をつりあげて嗤うさまは、悪役そのもの。コイツ、将来的にたいそうなＳになりそうな気がする。
「やらしい声、でてるぞ？」
「ばっ。それは！」
　高杉が悪い。
　剣ダコだらけの指が、素肌をすべる。肩や脚なら、声を我慢できる。でも、胸とか、下腹になると、もう耐えられない。
「とにかくダメだからな」
「おいおい。まさか」
　強引に話をうちきろうとすると、高杉は、俺の不安をすくいとってことばにした。
「怖いのか」
「ばっ」

　図星だった。

　俺は少し変になってしまったにちがいない。
　この男の熱をかんじる。それだけのことなのに、カラダが熱くなって、むずかゆいような、カラダの奥がとろけてしまいそうな、たよりない気持ちになっちまう。

　――ここから先は遊びじゃすまないから。

　雨にぬれ、水もしたたるニヤけ面を、にらみつけてやった。やっぱり、負けを認めるのもいやだ。高杉に負けるくらいなら、死んだほうがましだ。
「テメェなんざ」
　ぶっきらぼうに、ことばを吐いた。
「怖くねぇよ」
「よくぞ言った！」
　高杉は、微笑をうかべた。その笑顔の裏の極悪さに「しまった」、と思ったときには、遅かった。
「オイィィィィ！　なにしてんの！？」
　胸をしめあげる『さらし』の残骸が床にひろがり、着物のあわせをくつろげ

られていた。
「待て待て待てまてぇ…――ぁっ。どこさわって…やめっ」
　やわらかなふくらみを、下からぐいっと持ち上げられる。痺れるような感覚に、くちびるをかみ締めた。その様子に気をよくした高杉は、あいだに鼻先を埋め、からかうようにいった。
「ヤらせろ、最後まで」

―――続きは、製品版でお待ちしてます！（筆者）